

Book

「過疎は終わった！」 中国山地からの100年チャレンジ

「過疎」という言葉が生まれた島根県をはじめとして、中国山地はまさしく少子高齢化・人口減少社会の最前線である。そんな中国山地から「過疎は終わった！」とあえて大胆に投げかける新たな雑誌が生まれた。しかも、2020年から100年間発行することを掲げている。

『みんなでつくる中国山地』は、地域のために頑張る人たちが山地に点在していることを共有し、さらに中国地方の域を超えて日本のあらゆるローカルな活動をつなぐ。



年刊誌『みんなでつくる中国山地』006号

中国山地編集舎 (2025年11月) 定価 2,500円+税

第6号となる本冊は、昨今の「みんなでつくる」の広がり注目。各地の取組を見つめながら、わかるようでわからない「みんなでつくる」とはどういうことか、なぜ・誰が・何を・どうやってつくるのか、という問いに迫る。地域おこしに取り組む人、これから挑戦したい人に読んでほしい一冊である。

Website

つむぐ、つなぐ、つたわることで 15年経つ“福島”をアップデート

3.11から15年。放射線の影響に関しては様々な情報が巷にはあふれており、ともすれば、意図せずデマや風評の加害者にも被害者にもなり得るリスクにさらされている。

「つむぐ」「つなぐ」「つたわる」の末尾の三文字をとって名付けられた「ぐるぐるプロジェクト」は、放射線の健康影響に関する正しい知識と“福島”を知ること、不安や風評のない社会を実現していきたいという想いのもと、環境省が立ち上げたプロジェクトである。令和6年度からは福島在住の若者たちが自分たちの言葉で情報を発信していく「ふくしまメッセンジャーズ」の活動も開始。全国のイベントやSNS等で情報発信をおこなっている。

福島の安心と笑顔のためにも、放射線の健康影響に関する誤解・風評・偏見・差別のない社会を一緒につくりていきたい。



つむぐ、つなぐ、つたわる。環境省 ぐるぐるプロジェクト
<https://www.env.go.jp/chemi/rhm/portal/communicate/>

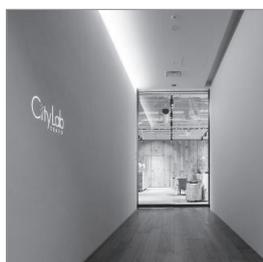
Place

持続可能なまちづくりを 共に考える場

これからのまちづくりに必要なものは何か。世代や文化、背景の多様性による多様なエネルギーを都市・地域の力に変え、イノベーションにつなげるためには、触媒となる「場」が重要である。

「シティラボ東京」は、これからの持続可能で新しいまちづくりに向けた共創のためのプラットフォームとして開設された。2018年に設立されて以来、コワーキングやイベントなど多様な用途で利用できるだけでなく、自主プログラムの開催や会員の交流促進、サステナブルビジネス特化型スタートアップコミュニティ「City Lab Ventures」の運営など、意思を持った空間づくりを指向している。

持続可能なまちづくりに向け、サステナブルシティの創造を目指す人々が集い、想いが形になる空間として、新たな価値の創出に期待したい。



City Lab TOKYO
(シティラボ東京)
<https://citylabtokyo.jp/>

Book

7年にわたる膨大な検討を経た 次なる共存社会のビジョン

世界的な傾向として都市への集中が進んでいるが、誰もが都市の生活に憧れるわけではない。歴史ある自然豊かな土地に目を向けると、自然と人が共存する社会づくりの重要性が浮かび上がってくる。

著者の安宅氏は、自然豊かな「疎空間」を、都市に頼らずとも人が住み続けられる“もう一つの未来”として再構築する構想として「風の谷」という概念を提示している。この「風の谷」をつくる要素として自然・インフラ・エネルギー・ヘルスケア・教育・食と農という6つの領域に着目。そのうえで、「生き続けうる場所 (viable place)」をともに作り上げる営みとして、都市と自然の両方を生かす空間デザインの試みを提案する。

IT戦略の専門家として、大学の教員として、また構想を形にする実践家として、これまでの検討と経験を網羅した力作だ。



「風の谷」という希望——
残すに値する未来をつくる
安宅 和人 著/英治出版 (2025年7月) 定価 6,000円+税